

## キサーゴータミーの気付き

学校長 太田 清史

本校は、建学の精神である「樹心」の願いを“To Be Human（人となる）”というスローガンにして人間教育を展開していますが、そこで言う「人間」とは何を指すのでしょうか？

多くの進学校では、有名大学への進学率を高め、より良い社会人になって有名企業や収入の多い職業に就いて、「社会的地位の高さと経済力」という豊かな人生を手に入れることを目標にしているように見受けられます。

本校の人間教育においても、同様の目標を掲げてはおりますが、それはあくまで自己実現の一つの分野に過ぎません。ただ単に、地位と名声と高収入だけを求めるために、本校は設立されたのではありません。

ところで最近、ずいぶん気になっているお話があります。それは、東本願寺から出版されている『仏典童話』1に収められた「けしの種」という物語です。

念願の赤ちゃんを授かったキサーゴータミーという若いお母さんは、急病であっけなく息子を亡くしてしまいます。今まで人の死を見たことがなく息子の死を受け入れられない母親は、子どもを生き返らせる薬を名医に貰いに行きます。しかしそれは、もとよりできないことです。名医から「お釈迦様なら何とかして下さるかもしれない」と聞いて、必死の思いでお釈迦様のもとに走ります。そこでお釈迦様は、こうおっしゃいました。「村の農家からけしの種を貰ってきて、それをのませなさい。ただし一度も葬式を出したことの無い家からですよ」と。キサーゴータミーは、死んだ息子を抱いて、次々に農家を訪れました。そこで知らされたのは、私たちのいのちの背後には、おびたしい死者があり、そのいのちを引き継いで生かされているのが、自分たちだという事実でした。母親はそれを気付かせてくれた赤ちゃんに感謝の頬ずりをして、お釈迦様にお礼を言いに行った、という話です。

本校の人間教育というのは、生きている間だけの人間を指すのではなく、すべての生あるものに必ず訪れる「死」を含んだ、「生死するいのち」という人間観に立脚しているのです。

「生まれたら必ず死ぬ。しかしその死は意味ある死である。死とは、本来いのちの生まれてきた元の世界に還らせていただくことである。いのちをどこまでも生かききって、この世の縁尽きるときには、感謝と共に元の世界に還らせていただく」というところに立っているのです。

生徒たちとの出会いは、三年または六年という短い期間ですが、樹心の願いは彼らの一生涯の成就に向けて、掛けられ続けているのです。